＊　＊　＊

二生の人　山崎一穎先生

文学部人文学科教授　神野藤昭夫

平成十七年（二〇〇五）の学園創立一三〇年を前に、学園史の編纂執筆の任にあたるよう、時の学長山崎一穎先生から指示を受けたのは、平成十四年春のことであったかと思う。平成十四年は、跡見がマネジメント学部を創設し、既存の文学部にも学部長が必要となって、私はその前年から学部長の任にあった時であったから、ともに委嘱された泉雅博先生とふたりで、その調査執筆には、正直なところ難渋した。それまで、大学には大学史じたいの先行著作はなかったし、あるのは『跡見開学百年』という年表と一二五周年に作成された『写真で見る跡見学園の歩み』に大学草創期の写真数葉が収められているばかりで、大学史の基盤をなす資料さえ収集整理されていたとはいいがたかったからである。

幸いに卒業生でもある講師の植田恭代先生の応援も得て、なんとか書き終えることができたが、跡見学園女子大学の歴史をたどってみて、創設期における伊藤嘉夫先生とならんで山崎一穎先生の存在がいかに傑出した重い存在であるかを思わざるをえなかった。

初代の学長は、理事長でもある飯野保先生であったが、大学はその構想の時から、学監たる伊藤嘉夫先生の、花蹊先生以来の伝統を継承、実現しようとする理想と情熱に支えられていたところが大きい。設置認可申請書をはじめ、大学開学の基盤をなす書類群はほとんど伊藤嘉夫先生の直筆になるものである。

開学式典の記念歌として作詞された「紫の一もと」は、その後、高雅な学歌として歌い継がれることになるが、伊藤先生直筆の原歌詞と自注とを記した原稿（『跡見学園――一三〇年の伝統と創造』資料編参照）などをみると、大学創設にかけた伊藤先生の、浪漫的ともいいたくなるひたぶるな情熱が伝わってくる。

しかし、昭和四十年代は、大学改革に象徴される怒濤の時代の到来でもあった。大学は、創設いくばくもなくして、牧歌的であることが許されない時を迎える。厳しい時代にふさわしい民主的な組織のなかで、自由で自律的な学生を育てる大学へと脱皮してゆくことが求められようになるのである。

その時、新生跡見の象徴のように登場したのが、山崎先生であ

った。昭和五十三年十月二十二日学長就任。山崎先生は昭和十三年九月の生まれであるから、当時四十歳になったばかりの、全国で最年少の学長の誕生であった。私は新聞でこの報を見た覚えがある。その一年半ほど後に自分がその大学に赴任することになろうとは思わなかった頃である。

その年に教授に昇格したばかりの人材を学長に据えるのは、今から思えば、大学にとってたいへんな勇気であったようにみえる。しかし、以来、平成元年までの十一年間、山崎先生は学長の任にあり、さらに時をおいて平成十年から平成十八年まで再び学長に就任する。だが、この間もさえも和田英道学長の不調の期間には、学長事務取扱の任につくなど、二十年近くも大学のトップとして、跡見を牽引してきたことになる。

特に、大学の淘汰、生き残りのための冬の時代を前にして、平成十四年、再開学ともいうべき今日の跡見の路線基盤を築いたのも山崎先生であった。おそらく民主的手続きによって選出された学長が、これほど長くその任にあり、時々の動向にふさわしい改革に取り組んだ事例は、日本の大学の歴史でも他に見出しがたいことではないか。

だが、山崎先生の傑出しているところは、大学行政の指導者であるばかりではなく、日本近代の文学、とくに森鷗外の人と文学に関する、質量ともに豊かな研究を残しているところにある。

かつて山崎先生の書庫を拝見したことがある。駆動式の集密書架を強固な基礎の上に収めるべく半地下にした三十畳にも及ぶスペースに、膨大な本と資料が整然と収められていた。ここに帰った山崎先生は、大学の教育行政の責任者から、書斎の人に変身したのであろう。

軍医と文学者の二つの人生を生きた森鷗外は、研究対象であるばかりでなく、山崎先生の師表でもあって、職場と自宅とを截然とわけて、みずからも二生を生きることをめざし実践したことが、先生じしんの生きる力とも誇りともなっているとみえた。

十年余り前のことだが、津和野の森鷗外記念館を訪れたことがある。館内を一巡して、それが山崎先生の森鷗外研究の成果がいかんなく生かされたものであることを痛感した。先生は記念館の運営協議会会長の任にあって、定期的に津和野に通って、みずからの書斎の世界における成果を、ここで思う存分に発揮し、どうやら東の地にあってはわからない、先生じしんのもうひとつの喜びと活動の源泉をここに得ているらしいと、私は思ったのである。

先生の数ある著作のなかで、平成十四年に刊行された『森鷗

外・歴史文学研究』（おうふう）は、近代文学の分野ではその見識の高さで知られるやまなし文学賞を受賞された。ひそかに思うに、山崎先生は、はじめから二生の人たる道をめざしたわけではあるまい。跡見が山崎先生を二生の人たるべく望んだのであって、学部学生時代以来の、一貫した着実な森鷗外研究の成果が高く評価されたことには、たいへんなお慶びがあったにちがいないと、同慶、祝福の念、禁じがたいものがあった。

大学の定年は迎えられたが、学園はなお、先生を必要としている。これからも、二生の人としての道を歩んで、私たち全体の師表たる姿を長く示しつづけていただきたいと思う。

＊　＊　＊

山崎一穎先生のこと

文学部人文学科教授　村松加代子

私が本学に赴任したのは一九七九年四月、山崎先生が学長になられた半年後のことでした。全国の私立大学で最年少の学長でいらっしゃるということで、確か翌年一月の皇室の歌会始へのお招きを受けられたと記憶しています。忝くも、菊の御紋のついたタバコを一本、おすそ分けに頂いたことを覚えています。

今にして思えば、四十歳の若き山崎学長を頭に跡見の青春時代とでも呼ぶべきリベラルな雰囲気の中で、私は専任教師としての第一歩を踏み出しました。教授会でも喧々諤々、そのあとは学科の垣根を越えて連れ立って飲みに行く。私は幼い二児を家に残しての共働きの身でしたが、運命共同体の新参者としての気負いと責任感（⁉）から、教授会後の飲み会にはほとんど毎回参加しました。それでも、疲れというものを知らず、あの頃は先生がたが実に生き生きとしていて、それぞれに個性を発揮していたように思います。ゼミ旅行も盛んならば、非常勤の先生との親睦会も各学科の年中行事の一つでした。教職員・学生が一丸となって大学を作っているというような雰囲気が学内に満ち満ちていました。今にして思えば、大学に氷河期が来ようとはつゆ思わない暢気でおおらかな時代でした。結局、私は勤務年数の半分以上を山崎体制のもとで過ごすことになります。

さて、ここで話を私の赴任時に戻してみますと、山崎先生はち